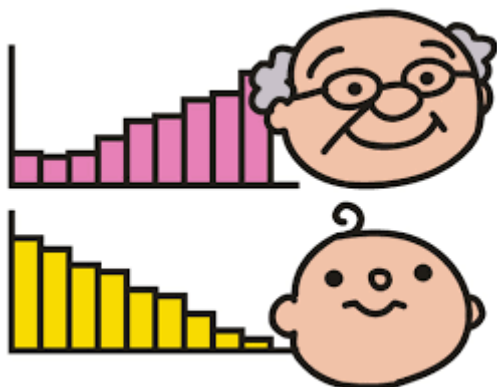


2017/25

(日々雑感 30) 統合版 (30の1修正加筆版と30の2)

(日々雑感 30の1) 修正加筆版 再加筆版



小さく産んで大きく育てる。

何となく分かります。男のぼくでも何となく実感が湧きます。

で、これを少し変えて、

少なく産んで・・・

上手い対位法が成り立ちませんでした。

現代の少子化傾向。国の未来の存亡がかかっている結構大切な問題です。

ぼくはそれを今まで、経済の問題だと考えてきました。

一人あたりの教育にお金がかかるから、そう多くは産めない。親の負担が大きく、自分自身の人生をも圧迫してしまうからだ。

世の中も、同じような意見で、そのため、そこからスタートして、まずは、教育費を下げなくては行けない。他の先進国同様、教育の機会均等化の観点から、教育の無償化が当然の帰結として導き出されました。

無論それはそれで、一理も二理もありますから良いと思います。

しかし、少子化の原因は、本当にそれだけなんだろうか？と最近疑問が湧いてきました。

というのも、若い親が裕福な家庭だから子供の数が多いかということとそんな相関関係はそれほどには見当たらず、却ってあまり裕福でない親の家庭の方が、よほど子供の数が多かったりするような気がしたからです。もちろんぼくの観察した範囲でしかありませんが、ぼくにはそう見えたのです。

それで、経済の問題だけではないのではないかと思いました。

で、何でだろうと考えてみたんですが、要するに「対応できないのではないか？」

つまり、食い扶持の数、言い換えれば食う口の数の問題より、子供の数だけある個性の多様性の数に対応する能力が、裕福な家庭ほど少ないのではないかと。

とある仮説が浮かびました。

では何で裕福な家庭ほど子供の多様性に対応できないのか？あるいは対応したがるのか？はたまた、多様であっては困るのか？などなど。

そう言えば、昔から対極的に「貧乏人の子たくさん」という言い方があるのも思い出しました。解釈としては、お金がない人は、遊び金などあろうはずもなく、やむを得ずしてお金のかからない「唯一の楽しみ」に走りがちなので、結果子供がたくさん出来てしまったと言うのが一般的です。

しかし、これも果たして本当に経済だけの問題なのだろうか？と同じような疑問も湧いてきました。時代を超えて、何か共通点があるのではなかろうか？と。

で、まずは自分自身の生い立ちや経験を振り返ってみました。というのも、ぼくは意外と裕福な家庭に育ったからです。自慢と言うよりそういう事実として振り返ってみました。すると、あることに思い当たりました。

それは、裕福な家庭、その成功や伝統に自信を持っている親ほど、自分のコピーを造りたがる。子供に自分のコピーになることを求める傾向があることに思い当たりました。

「自分が上手くいったんだから、おまえ達もそれに倣えば上手くいくはずだ。だからそうしておけばまちがいはない。いいな！」というような傾向です（幾分昔のことなので、多少物言いは時代がかっていますが）

そうして、師匠の教えのコピーを正確に行うためには、あまり弟子の数が多くては、手が回らなくなりますし、コントロールもしづらいからです。

一方、あまり裕福ではないご家庭は、それほど成功体験がある訳でもなく（無論経済的な面での成功体験のみ指しています）、その面で親に確たる自信も無いので、あまり親のコピーになることを求めない、あるいは同じような者が出来ても「負の連鎖」にもなるので、むしろコピー、つまり押しつけをしないのではないのだろうか？と。その結果、さして意図もせず、多様性が受け入れられてしまう、許されてしまうのではないかと。あるいは親が働くのに忙しくて、そこまで目が届かないこともあるかもしれません。

その伝に倣えば、現代の少子で裕福な家庭は、当初子供の数は絞ったものの、今度は逆に手間が余りすぎて、子供を構い過ぎる傾向があるかもしれません。

話を元に戻します。

もうひとつ気づいたのは、時代の流れに起因する別な傾向もありそうだとことです。それというのも、現代の裕福な家庭ほど、自分の親とは反対に、むしろ子育てに自信が無いように見えたからです。

平たく言うと「親が子のご機嫌を取っている」あるいは「人気取りをしている」とでもいいですか。言い換えれば「嫌われたくない」「嫌われることを火がついたように怖れる」「嫌われたらどうして良いか分からない。オロオロ」傾向。

こんな感想を抱いたのは、最近、若い父親や母親が、信じられないくらい自分の幼い子供を褒めちぎっているのを何度も見たからです。

「いいねえ！」「すごいねえ！」「お上手お上手」

その姿はまるで大人が子供に「おべっか」を使っているようにすら見えたのです。あるいは上司に対するすり手、もみ手の鞆持ちのようにも。ところが実際会社ではむしろそんなことはしていない傾向をぼくは知っていましたので、何故我が子にそうするのか疑問でした。それで、それやこれや、を含めて思わず、

「なんじゃこりゃ？」となったのです。

しかし、以下は推測ですが、ひょっとしたら今の親御さん達は、自分が子供の頃に抱いた親を親と言うだけで忌み嫌う感情を、今自分の子である「この子達」も同じように密かに抱くようになるだろうと査定をする上司以上に無意識に怖れているからこそ、そのような態度をとるのではないかと思ったりもするのです。

ところが、一方で別の親は、

「え、子供にそんなに辛く当たって良いの？」と傍目にも心配になるくらい冷酷無慈悲なつっけんどんと八つ当たりを幼い我が子にしているのを見ました。

これも推察するところ、こちらの方はもう、さっさと「取り入ること」を諦めて、「自分に従わないなら邪魔者でしかない。勝手に押し！！その代わり邪険にあつかってやるから。手な付かないヤツには甘い顔しないから。いいね！」なのではないでしょうか。

それで、以上の観察から、二つのタイプの親に共通していると感じたのは、要するにどう扱って良いか分からないから両極端の反応が生まれている。つまり扱いあぐねて「持て余している」のが見て取れました。

自分の親は自信があり過ぎた気がする。しかし今の若い親は自信がなさ過ぎる気がする。自信が無いから子供を上置いてその前をうろちょろする。自信が無いから子供が寄ってこないように蹴落とす。方や上に、方や下に。いずれにせよ、どこにも親子の対等さが無い。

いつの間にそんなに変わってしまったのか？いつの間に逆転劇が起きたのか？そしてそれは何故？何が原因で？

またしても疑問が湧いてきました。

2017/2/24

(日々雑感 30の2)



何故そうまで変わってしまったのか？何が原因で逆転劇が起きたのか？

そこで、試みに時代考察をしてみました。

ぼくの親は戦中派世代。ぼくはバブル世代。そうして子供は失われた20年の一端であるデフレ世代。今、そのデフレ世代が子育てをしている。

その世代史にぼくは、ふと思いついた自分にとって一番気になる「自信と自立」という切り口の心理的因子を掛け合わせてみました。

戦中派の親は、戦争を生き延び、戦後の混乱の中、戦後復興を果たし、それなりのもの築いてきた自信家。

バブル世代の子のぼくは、親からコピー化することを押しつけられ、受験戦争、出世戦争の中、嫌がりつつもなんとかひた走りに走り、さてこれからという時に、バブル崩壊で、時代の雰囲気が一気に変わり、それによって起こった急激な変化について行けず、やおら自信を失ってしまった世代。

そうして、デフレ世代の子供は、自信を失いお金も以前ほど使えない、自分達から見ると急にしぼんでしまっておどおどし始めた親がいる「つまらない」家庭の中で育った世代。

親を馬鹿にして「ああはなりたくない」と思いつつも、さりとして自分たちもどうしたら「ああはならずにするのか」が分からず、それを解き明かすか、越えるだけの、これといった手腕や才能を身につけた上での自信があるわけでもなく、その答えを持たないまま自分の子供達に同じような視線を浴びせさせられたらどうするか？の問いに怯える世代。

では、自信が無い人間が子供と接するとどういう態度を取るか？

簡単に言うと自信のなさを隠すために「逃げる」のです。一方では祭り上げ、一方では放り出して、自分の内側に入ってこないように、内側を見透かされないように、常に「逃げ腰」になるわけです。

その結果、戦中派世代の親達の大半が「褒めたり、叱ったり」の2ウェイの臨機応変な「使い分け戦法」で僕らと接していたのに対し、バブル世代の挫折時期から以降、現在のデフレ世代の前半くらいまでの親御さん達のこれまたかなりの部分の方々は「褒めるなら褒めるばかり」「叱るなら叱るばかり」の1ウェイに、あたかも手抜きでもしたかのよう、簡便な方法を選んで「お茶を濁す戦法」を採用しまったようです。

臨機応変という高等技術を使うには、応用を利かせるための「基礎」「基本」が出来ていなくてはなりません。基礎、基本が出来ているからこそ、それが自信にもなり、自信を得れば、自らの判断を信じる事が出来るので、あれこれ指示をされなくても、自ら状況を読んで判断して動く自発性が生まれ、それに伴って、それを継続することで自立するようになると思うのです。

自立していれば、自分の言動や行動の原理がしっかりしているので、多少異なった意見や事柄がやってきても、受け入れるキャパがあります。距離を置いてみる余裕もあります。更に進んで「範を示す」「手本になる」行動を子供達に見せることすら出来る可能性があります。

しかし、自立していないと、自分の足で立っているわけではないので、あるいは地面に刺した杭が浅いので、キャパも余裕もないまま、ちょっとしたことでぐらつきますし、ぐらつく以前に、少しでも自分を脅かす可能性のある、自分と違ったものを避けよう、遠ざからうから始まって、果ては否定しよう、抹殺しようになっていくようです。

これでは範にもお手本にもなりませんし「なってよ、見せてよ」と求められれば、それこそ「尻に帆を掛けて」行動を取るしかなくなります。

ちょっと違った言い方をすれば、自立の反対の依存から、全てを人が主導で決めさせるか決めてもらう、かして、上手くいったら自分の力、上手くいかなかったらそいつのせい、自分に関係ないと言う発想が生まれるのかもしれませんが。

では、自立の元の自信。自信の元の臨機応変、つまり「しなやかさ」「柔軟さ」の大元になった「基礎」「基本」に当たるものとはなんなののでしょうか？

反対に、それが無いために起こる「依存」とはなんなののでしょうか？

依存の方の正体は、ぼくの経験則に従えば割合と簡単にできます。

依存は単に相手に寄りかかるだけではなくて、自立できずにぐらつき、地盤沈下する折、相手の手足に無闇矢鱈とすがるとするために、相手をその沈下に引きずり込んでいくのです。掴んだら放さないのです。

もし、自分を守りたいなら、相手を自立させることです。自立は相手のためだけではなく自分のためでもあるのです。相手の自立を願ったり、求めたりするのは、求める側のきれいな事でも、お飾りでも、余裕でも何でも無いのです。

再び話を元に戻しましょう。

基礎、基本とは何なのか？何を指しているのか？

経験です。

経験の積み重ね。

ここで簡単な式を書いてみます。

知識+経験=智恵

勉強して知識を得ます。そのうちどれが役に立って、どれが役に立たないかを学ぶためにも、経験を積み重ねます。するとそれでフィルターがかかって取捨選択ができます。残ったものが、知識に有用な経験を付加した智恵となりますという意味です。

現代は、知識情報にあふれています。しかもその獲得に於いて、インターネットや電子機器の操作が主体になるので、その操作や接触頻度の高い若い人ほどスピードと量に於いて先の世代を凌駕しているのです、ともすると先の世代を馬鹿にしがちです。

一方、バブルの崩壊以降、自信を失ったバブル世代の親と、デフレで社会が停滞し、就職活動もままならないデフレ世代の子供達は、潜在的にリストラや不採用を怖れるあまり、嫌われまい、ミスを犯すまいと無意識に「経験すること」を避ける傾向がうまれました。

「たった一度の失敗が命取りになる。一度失敗したら最後だ。捨てられる。だから極力自分の方からは何もしないでおこう」

結果、経験というフィルターが伴わない知識だけが膨大にふくれあがりました。

経験というのは、単にいろんなことをという「量」だけの問題ではありません。「質」の問題もあるのです。何かというと、成功だけではなく失敗の経験もあるからです。むしろ失敗の経験の方が、本人にとって質的には高いのです。

「失敗はない。ただ経験があるだけ」

とは、そのことを指しています。

その大切な経験と経験の積み重ねがスポイルされているのが現代です。

経験を伴わない知識暴走の時代。知識+経験=智恵なら智恵が欠落した時代なのです。

若い親御さん達は、先代の話に耳を貸すより、まずは育児書に向かいます。

「子供は褒めなさい。褒めないと良い子は育ちません。アメリカの幼児教育は褒めることを勧めていますし」と書いてあったら、そちらに向かう世代のような気がします。

自分なりの試行錯誤、つまり経験をつもうとするよりも、知識だけでやりすごそうとする傾向です。

経験や経験の積み重ねを避けるために、知識に頼らざるを得ない。しかしその知識の真價は、経験が少なすぎて見抜けない。結果、風聞に頼らざるを得ない。人の経験による代行、つまり「口コミ」にやたらと弱い傾向。

まずは自分自らのアタマとこころと身体を使って、自分なりの経験を積むこと。それが基礎、基本の正体です。知識に経験を付加して智恵を増すこと。それが自信になります。

ただ、経験も自分の経験を偏重しすぎると判断の過ちを犯しやすくなります。そのストッパーとして、先代の親やその親の親達の経験話や失敗談を聞くことは補正役として有効であると同時に、世代間断絶や世代間情報量格差の解消、つまり世代間を越えたコミュニケーションの活性化にも役立ちます。

今は、情報があふれているのに、それを使い切れず、有用無用の識別選択が出来ないために却って混乱し、流され、不信感から個人および世代間の孤絶が生じているのではないのでしょうか。

最後に、最初の疑問に戻りましょう。

少子化の原因は経済的な問題の他に何かあるんじゃないか？という疑問です。

その答えは

「いろんな個性を持った子供。それに対応出来る自信が無いので、お金があっても子供は少なくしたいから（子の反乱が起きたときに平定しやすいように数は少なくしておいた方がいいから）」

が、その答えの全部ではありませんが、一つではないでしょうか。

前を向こうとしないで、後ろばかり見て逃げている人間に、子供を育てる自信も、子供の数を増やす自信があろうはずありません。子供に前の様子はどうなっているの？と聞かれても答えられないからです。

それは、今まで自分が、失敗を怖れて経験を拒み、本当に役に立つのか？の検証や裏付け

の確信のないまま知識の先へ進まなかったからです。

そのため、操作方法は知ってはいるけど、使ったことがないので、実際どう動くか分からない船の操舵輪を前にして、船客である子供に、それで大丈夫なの？と訊かれても、自信を持って答えられないし、さりとて分からないとも言えないので、行き詰まってしまうからです。

それを式に表すと、知識過多＋経験不足＝不均衡不安定自己＝自信欠如＝未自立

及びそういった負の連鎖、となるのではないのでしょうか。

そろそろ「失敗はない。ただ経験があるだけ」に気づいて、勇気を持って前を見ないと、この先、我々は大変なことになってしまうような気がしてなりません。